

## 第2回全体会議 アンケート結果概要

令和7年度 自律型無人探査機(AUV)官民プラットフォーム  
第3回 全体会議

---

2026年2月5日

# アンケート結果整理(ご指摘)

---

- ROV・AUVの使い分けについて

- 過去の議論内容が引き継がれていないため、一から議論を進めている印象である。過去の内容を確認し繰り返しの議論にならないようにすべきである。
- 洋上風力発電において海洋ロボティクスの運用方法の全体像を整理した上でAUVの利用について検討すべきだろう。
- AUVが活躍する場は、水深の深いEEZになるだろう。また、セミサブ型ではなくスパー型の利用が多いため、水深の深いスパー型を対象とした検討でも良いだろう。

- 海外動向調査について

- AUVの現状の技術動向を整理した上で、我が国の勝ち筋(差別化)について検討すべきである。また、水中機器の国産化についても議論すべきだろう。
- 海外進出先の候補に関する調査や事業拡大に関する検討も実施すべきであり、その中で中国の動向についても整理すべきである。
- ヒアリング調査の標本数の記載が抜けている。複数の結果を比較した上で一般的な内容に整理すべきである。

- コスト算出について

- ASV+ROVのコストが高すぎる。レジデンスタイプや製造過程でのコストカットなど今後のメリットの評価をどうするかも考慮すべきである。
- 前提条件は揃えるべきだろう。また、AUV及びROV単価が安すぎるため、設定の根拠を提示すべきである。
- 海洋ロボティクスを使用した全体像から、AUVを利用した際の削減や効率化を検討すべきだろう。
- ASV+ROVが不利な扱いを受けているような整理であるため、前提条件を一致させた比較が必要である。
- コスト比較は恣意的にAUVを挙げているように見えるため、点検成果が同一になるよう整理すべきである。

# アンケート結果整理(ご指摘)

---

- 今後の方針について

- AUVの早期社会実装が目的であるが、海洋ロボティクスや洋上風力発電の話題が多く、論点がずれてきている。市場形成の具体化やボトルネックの特定、解決策の策定を進めるべきである。
- 企業資本に頼っていることが社会実装が遅れている原因ではないか。国策として推進していかなければならない。
- 現在の議論は洋上風力発電サービスプロバイダー活動に特化しすぎており、AUV技術や要素技術の開発についても検討すべきである。
- 社会実装に向けた解の一つとして洋上風力発電が挙げられることは理解できるが、学実的な中身の掘り下げも重要である。
- データサービスの例として漁業への活用が挙げられているが、センサや取得データによって活用方法が変わってくる。漁業との共生については具体的な議論が必要だろう。
- 電力ケーブルの光ファイバーセンシングについて、内容を再度検討すべきである。
- 洋上風力のO&Mは、電気事業法と港湾法に従う必要があるため考慮すべきである。また、国内技術の利用が促進されるようにすべきである。

# アンケート結果整理(ご意見)

---

- ROV・AUVの使い分けについて
  - 両方の機能を持つ機体も検討対象に入れられると良いかと思います。
  - 実運用ではROVとAUVを併用しているため、AUVに限る必要はないだろう。
- 中国の動向について
  - 中国の動向も踏まえつつ、日本としてどう進んでいくべきか検討すると良いだろう。
  - 技術論だけでなくO&Mについても懸念している。また、東南アジアでの利用を目指す上でも、コンペティターとなりうる。
  - 中国の水深300mの新型ROVが100万円と桁違いに安く、品質も問題なく性能も非常に良い。

# アンケート結果整理(ご意見)

---

- 検討方針について

- 宇宙産業と状況が似ているが、動機づけの点で海洋は劣っている。綿密な調査と官民一体となった売り込みが必要だろう。
- 防衛用途について遠慮しすぎているように感じる。
- 国策企業の設立や強力なインセンティブ制度による加速が必要である。
- 洋上風力発電に限定するのではなく、港湾点検等、現在ROVが利用されていることにAUVも使用していくべきである。
- 浮体式洋上風力発電については先行きの不透明さが懸念される。また、海洋ロボティクスについては、洋上風力発電以外にもCCSへの活用ケースなども検討すべきだろう。
- 海底資源調査へのAUVの活動に関心があるため、そのような議論に期待したい。
- 洋上風力発電については欧米でも減速気味であるが、このままユースケースとして設定しても良いのか。